

御伽草子と土佐光信

—鼠草紙絵巻考—

宮 次 男

一

絵巻物が平安時代貴族社会の中で生成、育成されたことは、一般に認められる所である。現存遺品及び、文献に徴して、平安時代に製作、鑑賞されたと考えられる作品は、殆んどが、物語絵でありまた説話絵であった。それに代る鎌倉時代では、高僧祖師伝絵、社寺縁起絵が多数登場し、文学関係では軍記絵が脚光をあびることになる。勿論、鎌倉時代に於ても、物語絵や説話絵は製作されているが、上記の作品がこの時代を代表する主題であることには異論がないであろう。

室町時代は絵巻物の退潮期であるとする見方が広く行われていることは否定できない。その根拠は、平安、鎌倉時代のやまと絵と同じ場で室町絵巻を論ずるところに由来すると考えられる。たしかに、伝統的なやまと絵の画風と室町時代絵巻の画風を比較すると大きな差異が認められる。しかし、これは、それらを製作し、享受した人々の変質に伴った差異であり、換言すれば、絵画に対する享受者の美意識とか好み、あるいは

は理解度の時代的または社会的相違がここにみられるのである。したがって、室町時代絵巻が、平安、鎌倉の伝統的なやまと絵の作風を継承するだけではもはや、同時代の享受者には受け容れられず、そこから脱皮して近世的な風俗画へと転換する方向を示すのも、時代相を反映した結果に他ならないのである。

室町時代絵巻を主題の上からみると、社寺縁起や高僧伝絵が前代にひきつづき製作されたことは否定できないが、それらの多くは前代の絵巻を流布させるための転写として製作されたものであり、新に製作されたものも、前代の遺風を伝えるものが多い。したがって、室町時代の絵巻としてその特色が顕著なものは、同時代の小説に取材した作品ということになる。すなわち、平安絵巻が、物語・説話絵であり、鎌倉絵巻が社寺縁起・高僧伝絵、合戦絵が主要主題であったのに対し、室町時代はいわゆる御伽草子絵巻がこの時代の絵巻を代表する主題ということになるのである。

ここで、「御伽草子」という言葉についてふれる必要があろう。

御伽草子とは何かということについては、国文学の分野で論議される所であるが、一般にい^{注1}われていることは、この御伽草子には狭義と広義があるということである。

狭義の御伽草子とは、江戸時代の享保の頃（一七二六）、それ以前に写本や版本によって流布していた二十三篇の短篇小説を「御伽文庫」または「祝言御伽文庫」という叢書にして一括出版した作品を名付けて御伽草子と呼ぶもので、この叢書は大坂心齋橋の出版書肆、柏原屋渋川清右衛門が版元であったため「渋川版」とも呼ばれている。その二十三篇とは次の通りである。

- 1 文正草子
- 2 鉢かつぎ
- 3 小町草子
- 4 御曹子島わたり
- 5 唐糸草子
- 6 木幡ぎつね
- 7 七草草子
- 8 猿源氏草子
- 9 物艸太郎
- 10 さざれいし
- 11 蛤の草子
- 12 子敦盛
- 13 二十四孝
- 14 梵天国
- 15 のせざる草子
- 16 猫乃草子
- 17 浜出草子
- 18 和泉式部
- 19 一寸法師
- 20 さかき
- 21 浦島太郎
- 22 酒顛童子
- 23 横笛草子

この叢書は後に大坂河内屋吉兵衛も求板発売したようで、「浅井竜章堂蔵版書目」に

祝言御伽文庫 箱入全部二十三冊 一名御伽草紙 中古草子を集めたる書なり

として、二十三篇の書名をあげ、

以上廿三帖甚めでたきそうし也

と記している。また、享和元年（一八〇一）に成った尾崎雅嘉の「群書一覽」では

御伽草子 二十三巻 一名御伽文庫といへり

として、「御伽草子」が叢書名になっている。このように、御伽草子は、二十三篇に限って呼称された名称であった。^{注2}

その後、御伽文庫にもれた同種のもの二十篇が明治三十四年に萩野由之によって「新編御伽草子」という書名で二冊本で出版された。明治三十三年二月の萩野由之のはしがきによると

新編御伽草子は、世に行はるゝ御伽草子に漏れたる、古草子を集めたるものなり。原本二十種、多く不忍文庫阿波国文庫の二印を捺したり。けだし屋代輪池翁の旧蔵本なるべし。福富草子の表紙に一紙を押し、草

挿図1 鼠草紙

米国 フォッグ美術館保管

子の題目二十種を列挙して、新編御伽草子と題せり。

とあって、すでに何人かによって「新編御伽草子」として蒐集されていたものを萩野が出版したものである。その内容は次の通り。

- 上巻 1 福富草子 2 十番の物争 3 音なし草子 4 わか草 5 かざしの姫 6 常盤の姫 7 小おちくぼ
8 今宵の少将 9 毘沙門の本地 10 貴船の本地
下巻 11 浄瑠璃十二段草子 12 つき島 13 化物草子 14 魚鳥平家 15 狐の草子 16 こうろぎ草子 17 玉虫の草子 18 柿本の系図 19 立烏帽子 20 尤の草子

「御伽草子」とは、このように、渋川版に収められた二十三篇に限定して呼称された固有名詞であったが、後には「新編御伽草子」の例でも明らかのように、範圍をひろげて室町時代から江戸初期にかけてのこうした短篇小説を概括して御伽草子と呼んで普通名詞に用いることが行われるようになったのである。それは、これら短篇の内容が「お伽」というつれづれを慰め、婦女童幼を啓蒙するにふさわしい共通の性格をもち、また「お伽」という言葉がもつ魅力的なひびきによって拡大されたのであろう。ともかく、御伽草子には、以上のように狭義と広義の意味があるわけであるが、一般には広義の意味でこの言葉は用いられている。

三

さて、御伽草子を広義に解釈すると、室町時代中心に創作された中世小説の類が殆んどこれに含まれることになる。しかし、室町時代の製作になると考えられているこの種御伽草子類の絵巻は必ずしも少くはないが、その中には素人の手すぎびに描いたと考えられるものや、平安、鎌倉時代の伝統的やまと絵とは趣きを変えた新しい画風のものが多いため、美術作品として低く評価されていたので、これらについて美術史の側からの研究はあまり行われていなかったのが実情である。これは今後見直されることを期待するものであるが、御伽草子絵巻の中には、従来の価値観からいっても、決して低くない作品があることも事実であり、その多くは皇

族、将軍家など上流で享受されたと考えられる。

十二支に相当する動物が鹿を判者として歌合を催した際、狸がそれを羨み、判者の役を買って出るが、出席者たちに恥をかかされ、その恨を晴らすために十二支以外の狐、狼、古鴉などを語らって、双方合戦に及ぶが、結局十二支側の勝利となり、狸は世をはかんで出家したという「十二類合戦絵巻」三巻（京都 堂本四郎氏蔵）は、上巻詞書が後崇光院筆であることが、他の筆蹟との比較からほぼ確実であり、さらに、宮内庁書陵部蔵の伏見宮家文書にある後崇光院筆の数種の絵巻詞書断簡にもこの詞書があって、それらが年記や紙背の具注曆によって、宝徳三、四年（一四五二、五三）に書かれたことがわかるので、現存本も、ほぼその頃の製作であることが推察される。さらに、これよりさき、後崇光院の「看聞御記」永享十年（一四三八）六月八日の条には天皇から後崇光院にお廻しになった十二神絵（十二類絵）を御覧になっていることが記録されていて、宝徳三、四年以前にすでに「十二類合戦絵」が存在しており、それを後崇光院は書写されたことが推察される。^{注3}このように、皇族、天皇といった方々がこれを鑑賞し、愛玩されたことは明らかである。

このほか徳川美術館蔵「掃墨絵」二巻も、その伝来等は不明であるが、絵の優秀さを考えると、上流貴顕の間で賞玩された絵巻である。その内容は、長者の娘が一夜の宿を求めた僧に、それをもてなそうと心をつくして化粧したところ、眉墨と白粉をとりちがえたため、僧は鬼が出たと思って逃げ出した。娘は悲しみ、これも仏の戒めと思って剃髪し、北山小野の里に隠棲するという話で、絵は繊細な筆致で人物などきわめて可憐に表わし、四季の風物を取り入れて美しい。その画面には何かメルヘンの世界が意識的に表わされている趣がする。

以上の二例は室町時代初期に製作された御伽草子絵巻であるが、前記した伏見宮文書の中には後崇光院筆の数種の絵巻詞書が含まれている。^{注5}「十二類絵詞」のほか「三獣会合絵詞」、さらに断簡で「駿河なる儒者の話」前半部、「小児の奇得」後半部、「越前国新屋の弥太郎久季宇治川合戦譚」の後半部、「たかむこの秀武の話」（福富草紙）の一部、さらに「恋の語源の話」、「破

鏡の話」のほか、法師と小法師（小僧が巧智で和尚をやりこめる話）に関する笑話や破戒僧の話など十話が断簡ではあるがみられる。この事は、後崇光院がこれらの絵巻を御覧になり、興味を抱かれた作品の詞書を書写しておかれたことを証するものであって、御伽草子に対する親王の並々ならぬ関心の程が窺われるが、親王が御覧になった絵巻類が、天皇や将軍家でも鑑賞されていたことを思い起すと、こうした御伽草子が室町時代の初期の十五世紀前半には、鎌倉時代の絵巻と共にこのような上流社会で関心が寄せられていたことは容易に想像されるが、それらの絵は、また上流社会に通用する伝統的なやまと絵と同質の作風であったと推察されるのである。

「十二類絵巻」や「掃墨絵」の存在は、以上の推察に大いに役立つものであるが、土佐広周のような絵所の絵師が文安五年（一四四八）に「天稚彦草子」を描いたことも、こうした上流社会の需要に応じたものと考えられる。

四

現存の御伽草子絵巻の中には、足利将軍家において所蔵された「室町殿御絵」が少くとも二点伝存している。それは、「硯破絵巻」一卷と「狐草紙」一卷で、共に関西の個人の所蔵になるものである。

「硯破絵巻」（図版Ⅲ）は、すでに梅津次郎氏によって「国華」八二八号で「硯破絵巻その他——「小絵」の問題——」として紹介された小品で、その内容は、朝時大納言に仕える中太三郎という者が主人の大切にしている硯を割ってしまった。それを見た若君は身替りになって罪を告白したが、怒った父大納言はその首をはねる。母は悲しみのあまり出家するが、父もまたその後を追って落飾する。一方、罪を代ってもらった三郎は若君の菩提を弔い仏門に入るといふので、これは書写山性空上人の発心譚ということになっており、平出鏗二郎編『室町時代小説集』にも収録されている。縦十五厘の小絵で、その奥書に

明応四年十一月二十九日 源 義高

と書かれている。この源義高は十一代將軍足利義澄の前名で、明応四年（一四九五）当時、十五歳であった。

絵の描写は款記こそないが、土佐光信筆とみて過りないようで、簡素な構図ながら、屋台引きや、人物、器物などの確に描写し、特に人物の表情には光信筆の他の作品にみられるものに共通の庶民的な親しみが感じられる。

次に「狐草紙」は、『実隆公記』明応六年（一四九七）十月十五日条に

中山中納言来談 滋野井絵二卷令見之、一卷狐絵常徳院殿御物也、一卷八幡臨幸絵等也、

とある常徳院殿御物に相当するものと考えられる。常徳院殿とは、足利九代將軍義尚のことである。この絵巻についての紹介と考証はすでに「美術研究」二六〇号で発表したもので詳細はそれにゆずるが、この内容は、ある歳老いた僧都が牝狐にたぶらかされてこれと情交を結ぶが、地藏によって救われるというもので、僧侶の破戒譚と怪婚譚、それに地藏靈驗譚が複合したまさに御伽草子と呼ばれるに相応しいものである。萩野由之編『新編御伽草子』にその本文は収録されている。

この絵巻の縦の寸法も小さく一七・二糎で、絵の筆者はその描写の特色から、これも土佐光信筆と考えてよく、住吉広通及び同広純の紙中極も「土佐光信朝臣」と誌している。この絵巻の筆者が光信と考えられる所から、常徳院殿御物であったと推察したわけである。

以上、二絵巻はいずれも縦の寸法の小さい小品で、このような絵巻は当時「小絵」と呼ばれ『看聞御記』や『実隆公記』にしばしばみられる所で、梅津次郎氏がすでにこの性格について前出の論文で論じられているが、この種の小品絵巻は、堂上公家、或いは足利將軍家などにあって、低年齢層や女性のためのお伽用として用いられたと考えられるのである。

この種のものに、「地藏堂草紙」がある（図版Ⅳ）。この絵巻については「国華」八五一号ですでに紹介した所であるが、その寸法は前記「狐草子」と同じ縦一七・二糎で、巻末の狩野探

幽による紙中極は、土佐光持筆になっているが、「倭錦」など古画目録は光信筆と鑑定する。本文は市古貞次氏によって紹介され、『古典文庫』五三「未刊中世小説」三に収録されている。その内容は次の通りである。

如法千日の写経をする僧が、竜女の化身である美女に誘われ、写経を終えた後に竜宮へ行き、そこで契りを交すが、後、帰国した時は竜身になっていた。それを地蔵に祈願して人間の姿にもどることができたというもので、破戒、怪婚―入海竜宮行、地蔵靈験譚の諸要素をもち、この構成は前記の「狐草子」と似る所である。また、絵の筆者についても、土佐光信筆と推定できる諸特色を備えており、両者の製作環境と享受者層の共通性が指摘されよう。

その他、小絵として、「化物草子」一卷（ポストン美術館蔵）がある。その本文は『新編御伽草子』に収録されている。その内容は五話の変化譚をあつめたもので、一ありとたに（ぶよ）が小児の姿で相撲をとる話、二白い杓子がかち栗を乞う話、三柄の折れた銚子が耳高の法師になって夜な夜な遣戸から室内をのぞく話、四昼寝している間に蠅になった人の話、五案山子が化けた男と契を交した女の話、からなっている。本紙縦は二一・二種で前記絵巻よりやや大きいが、これも小絵の部類に入る。探幽の紙中極は土佐光持筆となっているが、その作風は光信にきわめて近いものである。このほか小絵ではないが、ある零落した男が、清水の観音の利益によって、牛の食べた布を口から引きだし、また埋められた蛙の祟りによって病気にかかった姫を救って、その姫と結婚したという話を描いた「蛙草紙」一卷（根津美術館蔵）も、光信風の作風で描かれた佳品である。

以上挙げた作品は、光信ないし光信の作風に極めて近似する遺例であるが、これらはいずれも御伽草子の絵巻であって、その中には足利義尚や義澄が所持したものがあり、その事例から推測して、これらの作品はいずれも上流社会の需要に応じて製作されたことはほぼ相違ないであろう。

光信ないしその周辺の絵師の手になる御伽草子は他にも製作されと考えられるが、東京国立

博物館蔵「鏡破絵巻」一巻は、土佐光信筆の紙中極をもつ模本であり、住吉広行の編集した『倭錦』には、光信の作品中、鼠草子、狐草子、鶴草子、藤袋草子、地藏堂草子の名がみえている。これらのうち、「狐草紙」と「地藏堂草紙」はすでに現存することが確かめられたが、さらに「鼠草紙」をこれに加えることができるのである。

五

鼠草紙と名づけられる御伽草子は、東京国立博物館、天理図書館、サントリー美術館ほかに蔵されているものが広く知られている。この話は鼠の権頭が、人間の女性と結婚して子孫を畜生道から救おうと発心し、人間の姿になって清水寺に参詣して良縁を願う。そこで美しい姫君に会い、これを見染めて結婚するが、畏にかかって鼠であることが知れてしまう。姫は遁世し、鼠は出家剃髪して高野山に入るといふ筋のもので、一名「鼠の権頭」と呼ばれるもので、広く流布するが、他に、東寺に住む白鼠の弥(子)兵衛の話がある。

ここに紹介する「鼠草紙」はそれらとは異なる短編で、婚期を過ぎた女性と結婚した鼠が、その家の飼い猫に食い殺されるという大筋のものである。

この「鼠草紙」の本文は、市古貞次氏によって昭和十七年に『未刊中世小説解題』に彰考館蔵写本をもとにしてその概略の筋と解題が示され、世に紹介されたが、のち、昭和三十一年この彰考館本は、横山重、太田武夫両氏共校の古典文庫一一七『室町時代物語』三に本文が翻刻された。これと前後して、昭和三十一年、藤井隆氏は御所蔵の土佐光信筆の奥書をもつ絵巻の模本を「未刊御伽草子と研究」(一)に翻刻、解説を加えておられる。これらは共に近世の模写本によるもので、その原本と覚しきものは『考古画譜』に、

鼠雙紙 一巻

倭錦云、土佐光信、鼠草子類聚目録
同之

〔補〕古画目録云、鼠草子、光信筆、養川院蔵、

〔補〕古画類聚目録云、鼠草紙絵、狩野某藏、光信筆、

〔補〕義海曰、蜂須賀侯爵家藏となれり、

と見えるものであった。

一昨年（昭和五十三年）の夏、ロンドン、ダブリンについて、ニューヨークで奈良絵本研究国際会議が開催されたが、その時、在米の奈良絵本類がジャパン・ハウスで展示された。そこにこの「鼠草紙」が展示されていたのである（図版V-VII、挿図I）。フォッグ美術館寄託の米国個人蔵であった。これにつづいて、「鼠草紙」は昨年の八月、東京と京都で同会議がもたれた時、他の在外奈良絵本類と共に、東京・サントリー美術館（八月一日）と京都・思文閣美術館（八月三〇日）でそれぞれ展示されたのである。

この「鼠草紙」一巻は縦一六・五糎で、まさに小絵といってよい絵巻である。次にその内容をのべよう。

第一段は、女と男の馴初めを述べるもので、近い頃のことであったか、心細く暮す尼君があった。尼君には一人の娘がいた。二十歳の適齢期になったが、容貌は醜くはないといっても、世間に聞える程の美人ではないので言い寄る男もいなかった。この家に仕える古女房たちも集っては、何とかこの娘に夫をみつけて尼君を安心させたいものと願っていた。時雨がしとしとと梢に降りそそぎ、鹿のね、虫のねが哀れをもよおす夕暮れに、折りしも荒れはてた軒端に月が昇って、趣き深い情景になった。女は、何時までもこうして月日を過すことなのかと思いつけて、どんな人でもよいから、志深く、語らう人が居ればよいがと、独言をつぶやいていると、何処から来たのか、なつかしげなる狩衣姿の男が月の光を受けて現れて、案内も乞わず立ち寄り、年来、貴女を思っていましたといよいよた。女は、そら恐ろしく思い、また尼君は昔風の人なので、どのようにいわれるだろうと惑ったが、男の話す有様が若々しく、またなまめかしいので、つれなくするのも如何かと思つて、いつしか心を開き、契を結んでしまった。

絵は、築地もくずれ、壁や縁が破れた荒れ家で、白犬のうづくまる勝手口で、下女が砵をわ

びしげに打ち、内なる居間では火桶をかこんで尼君と縫い物をする女房、冊子を読む娘、背をむけて坐す女房の四人が、所在なげに寄り合っている。いかにも女だけの生活のわびしげな風情がよく描かれている。次いで居間につづいて秋草が描かれた障子絵がみられる座敷では、縁近くに坐った烏帽子に狩衣姿の男と、娘が対座して語らっている。その庭先に続く山の端には二匹の牡鹿が妻をもとめてわびしげに鳴いており、梢の彼方に満月が昇って、霞ごしにこの光景を照らしている。

第二段、一度、契を交した後は、男は一夜もかかさず毎夜かよってきた。馴れるにしたがつて、女も浅からず思うようになった。男は折りにふしていろいろな贈物を持ってきたので、貧しかった家も、程なく裕福になった。尼君は、これを知った当初は怒ったものの、二人は浅からず思い合っている上に、このように忠実に通ってくるので、二人の仲をゆるすことにして月日が過ぎていった。女房たちも、日頃の願いがかなった心地して、うれしく思い、今はもう心配ごとのない有様であった。しかし、尼君はまだ男と対面していないので、会ってみたいと思つたが、昔風の人なので、親しく二人の所に入って行くようなことはしなかった。それにひきかえ、二人は仲よく賑やかにたのしそりにしているので、尼君は、二人が結ばれたことをうれしく思い安心するのであった。

絵は、居間で衣裳などをとりそろえ、整える女房と尼君が、いかにも楽しげに語らい、その縁側には男が持参したのであろうか、酒樽と魚が置かれている。それを猫がねらっているのは、この物語の終結を暗示するものであろうか。この場面につづいて、この居間から奥の間への渡り縁が、大工によって修理されている。板が檜かんなどでけずられ、金槌で打ちつけられる有様は、いかにも、この家に幸福がもたらされた趣きを示している。ついで、男と娘が侍女にかしづかれ、酒を酌み、語らっている座敷の様子が描かれる。そこに箒の端がみえるのもこの場に一種の賑はいを感じさせる。手前の隣室には朱塗りの棚が置かれ、菓子や酒器、酒壺などが並んで、いかにも裕福なこの家の有様が窺われる。この第二段の絵は、前段とは対照的には

なやいだ一家の雰囲気がよく示されている。

第三段、尼君は男と会うこともせず年月が過ぎるが、いつまでもこういう状態ですごすわけにもいかず、女房たちもすすめて、ある時、娘聶に晴れて対面することになった。会ってみると、男はとりわけて美男ではないが、みにくい者ではなく、物を言う有様など憎からずおぼえて、尼君も安心し、やれ嬉れしやと思うのであった。この尼君には年来可愛がっている猫がいた。その猫が下女の裳にじゃれついてこの座敷にやってきた。これをみた聶殿は顔の色がさつと変り、身はわなわなとふるい出した。どうした事かとみまもっていると、猫は男に飛びついて、喰いついてしまった。よくよくみると、男は大きな鼠になってしまっている。大変不思議なこと一同ただ茫然とするばかりである。娘はただ夢みる心地で、このような鼠の化身と契ってしまったことを浅ましく思うのであるが、また、この年月をいろいろと浅からず語らったことなどなつかしく思われて、うれいに沈むのであった。

絵は、先ず尼君に対面する聶殿の光景が、屏風を立て、障子絵で飾られた尼の居間を舞台に展開する。尼の左側には娘が体を斜向きに坐し、尼の前に聶殿は右手に折りたたんだ扇を持って語らいの態に示され、端近に侍女が坐る。初対面のいささか緊張した雰囲気の人々の表情、姿態から感じとられる。

次に場面は障子を隔てて一転し、秋草を描いた杉戸から水墨の芦を描いた壁にそってのびる縁に侍女が食物をのせた懸盤を捧げて現れ、その裳の裾に猫がじゃれついている。そして、座敷にこの猫は移って、尼君と娘を相手に酒宴に興ずる聶殿に対し、背を丸め飛びかかろうと目をむいている。聶殿は目を見開き、髪の毛を逆立てて恐怖の色が歴然とあらわれている。その背後、障子を隔てた次の間では、猫が大きな鼠にかみついており、その有様を尼君と娘と侍女の三人がかなしげに眺めている。

この三場面は、いはば猫を主人公にして異時同図的に表現している。その構成と処理の仕方はまさに見事というべきで、猫の三態に注目すると、事件の進展がよく理解されるといえる。

う。

ここで翻って三段の絵をみると、第一段は貧しい家で婚期を逸した娘の行末を安ずる一家の者たちの憂えと、月光を浴びての男女の語りいで、いずれも哀れをもよおす情趣が示され、第二段は、聳をむかえる華やいだ喜び、そして第三段は、その喜びから急転して破局に至るという、三場面それぞれの特色が画趣の上によく表わされている。これは、音曲や能楽にみられる序、破、急の変化を絵画的に表現したものとみてよいであろう。また、尼の家が段次が進むにつれて障子絵や調度など次第に整備され、裕富に示されていることも筆者の配慮によるところである。このように、わずか三段だけであるが、これを描くにあたって、筆者は周到に計画をたて、しかも各場面にあつては、詞書の行間の意を汲んで前記した画趣にそれぞれ表現しているのであつて、これを製作した絵師が決して凡庸のものでないことは明らかである。

六

この「鼠草紙」の筆者については、前出の藤井氏蔵模本には「土佐光信筆印」、「預絵所」、「従五位下右近将監」「光信筆」と巻末にあつて、これは紙中極であったと考えられ、土佐光信筆の伝称が早くから行われていたことが推定できるが、最近、手に入れた模本にも、その奥書に

貞享五年二月廿日ニ写

絵土佐光信筆生筆写

と本紙末に書いてあり、さらに奥付けの別紙に

土佐左兵衛尉光高十四歳写

中 牧野貞廣写

口 三浦三太郎写

右之絵銀座岸部次郎右衛門所持也外題遣

とあって(挿図2)ここにも土佐光信筆と書かれていて、少くとも江戸中期の貞享五年(一六八八年、九月三十日元禄改元)以前に土佐光信筆として広く知られていたわけである。また、東京芸術大学にもこの模本一巻があり、これには奥書や紙中極がない。しかし、原本を忠実に模している。このように、模本に関するかぎり、その紙中極の体裁も異り、無いものもあって、原本の状態がはたしてどのようなものであったかこれだけで推測することはむづかしい。

そこで、本絵巻はどうかというと、奥書には何も書かれていないのである。また、これの伝来を知る添状もない。ただ箱表には「土佐光信筆」と筆者名が書かれている。したがって、『考古画譜』にみるように、これが蜂須賀家伝来であったかどうか立証することは、今の段階では不可能である。しかし、われわれの関心は、この絵巻の筆者が何者であるかという点である。

『考古画譜』の記事や、模本の奥書などに惑わされて、これが光信筆であることが自明のような錯覚におち入る恐れがある。そこで画体そのものから、改めて考察する必要があるだろう。

土佐光信筆としてほぼ確証ある絵巻としてはおよそ次のものがあげられる。

文明十九年(長享元・一四八七) 星光寺縁起(『実隆公記』)

明応四年(一四九五) 槻峯寺建立修行縁起

同年 硯破絵巻

明応六年(一四九九) 石山寺縁起卷四(『実隆公記』)

文亀三年(一五〇三) 北野天神縁起(『奥書及び実隆公記』)

永正一四年(一五一七) 清水寺縁起(『宣胤卿記』)

(年代不明 狐草紙、地藏堂草紙、平家物語)

このうち、特に典拠を記入しないものは、作風の上から、光信筆と考えて妥当と、大方の意見が示している^{注7}ものである。

そこで、これらの作品を規準にして「鼠草紙」を考察しよう。

第一段の末尾にみられる野外の描写、特に樹木の輪郭線と土坡の線は、光信の筆線の特色がよく示されている。運筆に強弱のアクセントがつけられており、梢や枝の末端の鋭い描線は、彼の筆癖がそのままに示されているといつてよいであろう。これは他の段の画中障壁画の樹木でも同様である。

次に第三段の壁貼付にみる水墨の芦図には光信筆絵巻の画中画にしばしばみられる巧みな筆致に通ずる所があり、筆者の並々ならぬ画業の程がしのばれる。これら樹法や土坡の皴法は一応光信の作風を示すものとみてよいであろう。

人物の描写については、細い筆線で面貌など綿密に描写し、その表情もきわめて尋常で古典的な趣きが示されている。この点は光信風の人物といささか趣きを異にするようにもみられるが、比較的初期の「星光寺縁起」や、その前の作と考えられる「狐草紙」の人物の中には、このような綿密な面貌描写を示すものがみられるのである。また、第一段の砧打ちの下女や、第二段の縁を修理する大工の表情には、光信画にみる庶民層に共通する明朗さが示されている。

全般的にみて本絵巻は繊細な感覚が随所にみられる。そして、明澄な色感が示され（現在かなり脱色し変化するが）たことが推察されるが、この種の作風は光信の明応以後の作品、特に「北野天神縁起」や「清水寺縁起」とはやや異り、初期の「星光寺縁起」、「狐草紙」に近似するもので、さらに光信以前の応永二十一年（二四一四）寂濟等筆「融通念仏縁起」（京都・清涼寺蔵）（挿図3）に類似した作風が窺われる。このように考察してみると、先に述べたような序・破・急を思わせる周到な構成と真摯な作画態度などを考え合わせて、文明元年（一四六九）に絵所預に任ぜられた頃、光信の最も意気の揚った時期の製作ではないかと考えるのである。

挿図2 鼠草紙模本奥書

以上、「鼠草紙」について考察した所を述べたが、この推論が当を得たものであれば、本絵巻は土佐光信の作風形成を考えるうえから、貴重な遺品になることはいうまでもないであろう。

注

- 1 徳田和夫氏「御伽草子研究の軌跡と現在」(国文学解釈と教材の研究 二二ノ一六)は、この問題のみならず、御伽草子全般についての研究動向が手ぎわよくまとめられており、参考にすゝる所多い。
- 2 市古貞次氏『中世小説の研究』、同「御伽草子とは何か」(国文学解釈と教材の研究 二二ノ一六)による。
- 3 角川版『日本絵巻全集』一八所載の梅津次郎氏と岡見正雄氏の解説参照。
- 4 梅津次郎氏「徳川美術館の掃墨絵について」(大和文華二五)参照。
- 5 石塚一雄氏「後崇光院筆物語説話断簡について」(書陵部紀要一七)
- 6 『看聞御記』には随所にこのような事が窺われる記事がある。
- 7 吉田友之氏『土佐光信』にはこれらの作品を光信筆に比定している。(昭和五十二年—五十四年度文部省科学研究費「一般研究」(A)の成果の一部)

寸法表(単位種)		
宮次男測定		
縦		16.6
横		461.0
第1紙	詞 I	42.8
2	〃	45.0
3	絵 I	44.8
4	〃	46.2
5	〃	14.7
6	詞 II	42.6
7	絵 II	46.6
8	〃	37.9
9	詞 III	43.6
10	絵 III	46.1
11	〃	20.5
12	〃	30.2

詞書 公刊

異体、変体の文字は現行のものに改めたが改行は原文通り

近比の事にや最心ほそく

てすくしける尼きみあり

けりむすめをなん独もちて

かなしき物に思ひける維かぬ

月日なれば廿はかりに成に

けりみぬなんとはいたくにく

からねとも世にきこゆる程の

かたちならねはいひよる人も

なし捨かたきふるこたちな

とつとひめて又なくさひしき

まゝにはあはれ此君をいか

ならむ人にもさもあらん契

いそぎ給てあま君にもこゝろ

安くみえたまへかしなんとね

かひけるに春夏もほとなく

過て妖の末つかたいつより

も時雨隙なき木末そめ

わたし鹿の音虫のねもとり

あつめ哀もよほすおりしも

荒たる軒葉の月もたゝ

こゝもとのをまへになんたゝ

おかしき程なるにはし打永目

て月日をくくりいつまでか

あるへきなんとおもひつゝけて

何となくいかならむ物にても

心さしふかくかたらふ人もかな

と獨こちて居たるにいつこ

よりともおほえぬになへしはみ

たるかり衣姿なる男此月

影にみれば細やかになつかし

けなるか安内などもせてたゝ

こゝもとへ立きて季月満

てし心の色ふかく行ける思

いかてかをろかにおもひ給ふ

へきは山の茂みもまこと

に思ひ入にはさはらざりけり

はしめて今夜を思ひしりはへり

ぬる更に空しく立いつ

へき心ちなしとて縁か内に

さしよりなんとするにいと行

ゑしられぬもそらおそろしく

又尼きみはむかしひたる心にて

わかゆるしなくあらんことは

いかなるめてたき事にても

思はずにほいなき事におほさん

する事のまつ如何かと覚ければ

あるましき事と思ひたるを様く

こしらへつゝ物などいふさまわか

なまめかしくみえければさのみ

なさけならむも如何はたと覚そ
いとつよからぬ心にや

〔絵〕

関こえにし後は夜をかゝす

かよひけり馴ゆくまゝにあさ

からす契かたらひ女もあはれを

かはしけりさるへきおりふしには

さまくゝとふらひければまつしかり

し家も程なくゆるらかに成ぬ

あま君かく行ゑなく我にも

しられてかゝる事とうらみし

かとも浅からす思ひたるけしき

なるうへかくまめやかにとふらふ

心さしにおもひゆるして月

日をくくりけりこたち共もねかひ

みちたる心ちしてうれしく今は

思ふ事なきけしきとも也尼君の

對面などもいまたし給はぬ事を

常はうらみけれとも昔ひたる心ちにて

入たちなとはしかと覚けりひき

かへにきはしくいつとなく遊たはふ

れてけにかゝりける契の有難く

ふしきなる事と母君も心やすく

おもひけり

〔絵〕

やうやうとし月にも成ぬれば
 さのみはいかてかへたてたまはん
 なとこたちともすゝめて有
 おり尼きみたいめんしたまふ
 みるにいとなまめきそこととり
 わきよき所はなけれともにく
 からす物なといひたるさま口おし
 からぬけしきなればみるかひ有
 心ちして心安くうれしと思たり
 かくてあま君とし月ねこそ
 いとおしかりてあたりさけす
 かひけるかきぬの濯にまとはれ
 て此座敷へ出にけりねこをみ
 つけて簀のかほの色かはり次第
 にわなくとみえけるに何と有
 事やらんと心えず打まほり
 けるにねこふとよりてくひぬ
 みれは大なるねすみ也いとふしき
 にあきれて物もいはれす姫君は
 たゞ夢をみる心ちして身の契の
 程もあさましくさるは此とし月
 さまくあさ
 からす

かたらひつる

言の

なと色く

は

おもひつゝ

に

かきくら

けて

すも

まめやかに

此世ならぬ

契なりかし

とそ

美術研究所報

研究会 昭和五十四年

十二月 十二日 絞り染について

―特に辻ヶ花染末期―

昭和五十五年

一月二十三日 近世絵画に於ける戯墨の系譜

―近世水墨画の展開について―

三月 五日 法華寺藏阿弥陀三尊・童子像の製作年代を

めぐる問題

美術部・情報資料部公開学術講座

昭和五十四年十二月十五日(土)午後一時三十分～四時三十分、日本経済新聞社小ホールにおいて左記のとおり開催した。

室町絵巻と奈良絵本

明治初期の渡欧画家について

神谷 榮子

鈴木 廣之

柳澤 孝

宮 次男

三輪 英夫